

<書 評>

## 中根千枝 『適応の条件』

(講談社, 1972年, 181頁)

軽 部 恵 子

2021年10月20日、中根千枝が94歳で逝去した。各紙が訃報を伝えたのは11月5日で、葬儀は親族のみで執り行われたという。

中根は、1926年11月30日に東京に生まれた。津田塾専門学校（現・津田塾大学）を卒業し、戦後に東京大学へ入学して、1950年に同大文学部東洋史学科を卒業した。同じく津田塾専門学校から東京大学へ進学した女性に、赤松良子と森山眞弓がいる。前者は、労働省（当時）婦人少年局長（後に婦人局長）として男女雇用機会均等法制定に多大な貢献をした。その後、駐ウルグアイ大使、細川護熙内閣の文部大臣等を歴任した。現在は、女性の政治参画を拡大する「クォーター制を推進する会」（通称「Qの会」）の代表を務めている。後者は、1980年に労働省（当時）から政界入りし、1989年に海部俊樹内閣で女性初の官房長官に抜擢された。翌年の大相撲初場所に官房長官として総理大臣杯を土俵上で授与しようとしたが、日本相撲協会の反対にあって叶わなかった。その後の経歴は略すが、森山は2021年10月14日に93歳で逝去した。

中根、赤松、森山は津田塾の英語教育を受けたが、このことが3人のキャリア構築を大いに助けたのは想像に難くない。中根はインドや英国等で調査

研究を行い、赤松は国連代表部公使となって1979年12月の国連総会に出席し、女性差別撤廃条約の採択に賛成票を投じた。森山は、1985年にケニアのナイロビで開催された第3回世界女性会議の日本政府主席代表を務めた。インターネットやオンライン会議の時代になっても、しっかりした文法の知識に基づく英語力は欠かせない。文意の正確な理解に文法の知識は欠かせないからである。

話がやや逸れたので元に戻そう。周知のとおり、中根は社会人類学者として、長年にわたり活躍してきた。女性初の東京大学東洋文化研究所教授(1970年)、女性初の東洋文化研究所所長(1980年4月—1982年3月)、女性初の日本学士院会員(1995年)、紫綬褒章(1989年)、文化功労者(1993年)、そして文化勲章(2001年)という輝かしい経歴・受賞歴を持つ。文字通り、女性研究者のパイオニアであった。

中根の著作で最も有名なのは、1967年に出版された『タテ社会の人間関係』(講談社現代新書)である。訃報を知った評者が、同書を暫くぶりに読んでみようとしてインターネットで注文したところ、同じことを考えた人が多数いたのか、入手までに2週間近くもかかった。同書の奥付には、2020年10月20日第132刷発行と印刷されていた。半世紀以上にわたり改訂の必要がなく、これだけ増刷を続ける本は滅多にない。これに匹敵しうる書籍として評者が即座に思い浮かぶのは、幕末から明治初期にかけて日本で活躍した英国の外交官、アーネスト・サトウの回想録『一外交官の見た明治維新』(全2巻、岩波書店、1960年)ぐらいである。もっとも、回想録は改訂の必要があまりないので、『タテ社会の人間関係』は別格と言えよう。

評者が『タテ社会の人間関係』を待つ間、同時に注文した中根の他の著作で、『適応の条件』(講談社現代新書、1972年)が早々に到着した。こちらは2020年5月14日で第44刷を数える。とりあえずと読み出したところ、ページを繰る手が止まらなくなった。そこで、本稿では『適応の条件』を主に紹介したい。

著者が本書を執筆することになったきっかけは、エコノミック・アニマル論などの日本人に対する非難と攻撃、そして海外に居住する日本人が現地に適応できない困難さを、社会人類学の立場から分析しようとかねてから思い、タテ社会の人間関係を生んだ日本社会、日本人への関心に基づくであるという（まえがき, p.4）。著者は、日本人が、海外、あるいは国内でも異なる環境に置かれた時、どのように反応をするのか、その反応をもたらす日本的システムと価値観の特色は何かを理論的に考察している（同）。本書の執筆当時、日本人が海外へ行くことはまだ容易ではなかった。一般旅行客の外貨持ち出し制限（年1回、500ドル）が撤廃されたのは、本書執筆の8年前の1964年であった（「探訪戦後70年 海外旅行創世記 制約だらけの高嶺の花」『産経新聞』2015年5月24日, <https://www.sankei.com/article/20150524-IYGYZ2VJNRLQPAFLU3G3365X2A/>, 2021年11月27日 アクセス）。海外駐在員はエリート社員の証であったが、一定の語学力を持ち、専門分野で優れているとされた者にも、海外生活は決して容易ではなかったことがわかる。

本書の構成は、第一部と第二部から成る。第一部は「カルチュア・ショック——異文化への対応」と題し、11の章からなる。各章の見出しは、「1 異なる文化の拒絶反応」、「2 日本文化（システム）への逃避」、「3 表現と実行のあいだ」、「4 特定ケースと一般化の問題」、「5 日本的システムの強制」、「6 日本的信頼関係の敗北」、「7 契約に信頼を置く欧米との違い」、「8 現地社会への逃避」、「9 国内用の異国」、「10 外国語の修得と文化の関係」、「11 個人差による適応度」となっている。

異なる文化の拒絶反応の例として、ワシントンD.C.に設立された研究機関の所長に、ある英国人研究者がふさわしいと皆の意見が一致したが、長年アメリカに滞在した経験があっても、本人いわく、物事の進め方一つ一つがアメリカと違うからと断った話が紹介される（pp.11-12）。また、定年間近のアメリカ人が実際にイングランドの田舎に滞在し、定年後も住みたいと

思ったが、決して英国社会の一員とはなれないからやめるようにと英国人の友人から忠告されたという (p.12)。評者は、ヴィクトリア女王の夫君アルバート公が女王と同じドイツのザクセン・コーブルク・ゴータ家の出身であり、英国で最初の称号となる「王配」(prince consort)を得たのが結婚から17年後の1857年であったことを思い出した。日本の古い町や村でも、学生や長期の観光客として滞在する際は歓迎されても、いざ住民になると何かと大変と聞くことがある。

外国に滞在中の日本人が日本食に固執するという指摘 (p.17) は、評者個人の適応力がかなり低いので耳が痛い。日本人がアメリカの大学学食でサンドイッチ、ハンバーガー、フライドポテト等を食べて続けていると、野菜不足、糖分・油分の過多となり、たちまち健康を損ねてしまう。評者が知る中国人留学生は、滞米数年目であったが、自分はアメリカ人のようにコーラやアイ스티ーなどの冷たい飲み物を飲めないとこぼしていた(現在の中国人留学生は異なるであろう)。中根の成功の陰には健啖があった。現地の食物を喜んで味わえることが、フィールド・ワークに出かけて病気にならないこと、そしてインタビューの対象となる地元民と親しくなる最短最良の方法だからである。

日本的システムの強制 (p.32) は、日本企業が海外に進出した時に起きるだけではない。たとえば、1990年代初頭に日系アメリカ人を労働者として導入した時、ラテンアメリカ出身の日系人と現地の人々に少なからぬ摩擦が起きた。子どもたちを受け入れた小中学校の教師たちには一般教科の他、日本語の補習、生活習慣の指導などで、並々ならぬ苦労があったと聞く。同時に、外国生まれの生徒たちも、文化のスイッチを切り替えることにさぞや苦労したであろう。

「外国語の修得と文化の関係」(p.68)の章では、日本人が語学のできないのは、能力が無いのではなく、意欲がないからと著者は考える (p.69)。日本では、思考・意見の発表にまでも序列が関係する(『タテ社会の人間関

係』pp. 82-86) ので、真剣な議論する必要があまりなかった。20世紀後半から、日本のテレビ番組には複数の出演者による「討論」番組が増えたが、他の出演者の発言中に割って入る、他の出演者を罵倒するなど、ヒートアップさせる演出が少なくない。これでは、母語においてすら、自身の思考を論理的に説明し議論を戦わせる機会がない。

「個人差による適応度」(p. 81) では、著者がアメリカ人にすき焼きを供する場面が出てくる。食事の終わり近くに漬物を出したら、アメリカに長く滞在する日本人が「それは出さないほうがよい」と言って、客から見えないところに置き、後で自分がこっそりおいしそうに食べたと言う (p. 88)。著者はこれに対し、自分の文化を卑下する必要はない、アメリカ人が漬物を嫌いで食べないならそれでよい、箸が使えない人には後からフォークを出せばよいと、自国の文化に自信を持つべきときっぱり述べる(同)。一方、評者は20年程前に日本食と全く縁の無い英国人から、パック入り鰹の削り節が金魚の餌のように見えると言われ、仕方ないかと苦笑したことがある。また、アメリカ人から、海苔のにおいは自分にとって腐っているようだと言われ、別の時に自分のアパートの台所で何か臭うと探し回ったところ海苔巻き用の海苔を見つけたことがあった(もちろん腐っていなかった)。評者は異文化に適応しすぎて海苔の匂いが臭いになったが、著者が知ったら何と言うか。

第二部「日本の国際化をはばむもの——社会学的諸要因」は、「1 厚い“ウチ”の壁」、「2 日本人の社会学的認識」、「3 連続の思考・ウチからソトへ」、「4 二者間関係における連続」、「5 義理人情の分析」、「6 もてる者ともたざる者の関係」から構成され、「日本人の行動、人間関係のあり方を社会的(文化的)に規制している社会学的諸要因」を考察する(p. 94)。著者曰く、これらは日本語の文法のようなものであり、日本社会の中で機能しているので、異なるシステムに対応すると機能しなくなるか、思わぬ弱点をさらけ出すという(同)。ウチとソト、義理人情などはよく議論されてい

るので、ここでは「6 もてる者ともたざる者の関係」について触れたい。

「もてる者ともたざる者」(p. 159)は、今日もなお続く議論である。開発途上国への援助が少しも感謝されないと日本国内で不満が出、一方の援助される側には、もてる国なのだからもたざる国への支援をすべきだという意識がある(pp. 159-160)。評者によると、連続の社会である日本人は、もてる者ともたざる者に分けて見ることになれておらず、自分のより近くにいる者がより重要な関心の対象となつて、遠くにいる者(被援助国)には関心がますますなくなる(pp. 160-161)。その結果、日本人の弱者に対する態度はきわめて冷酷となるという(p. 162)。一方、悲劇的な事件が報道されると、同情の手紙や未知の人からの寄付金、はては多額の寄付をする人が出てくるが、これは特殊なケースであり、社会的慣習ではない(p. 162)。もっとも、1995年の阪神・淡路大震災以降、2011年の東日本大震災、その後の地震・台風・大雨による大規模災害で、親類縁者や友人がいなくてもボランティアに駆けつける人が増えた。こうしてみると、日本の社会も変わりつつあるのか。ぜひ著者に問うてみたかった。

先述のとおり、本書は半世紀を経て、改訂されることなく、日本の社会と日本人の人間関係の構造を指摘し続けた。著者は社会人類学者の目で丹念に事例を拾い上げ、体系的に整理して叙述した。今もなお、本書を読んで納得することが多い。別の見方をすれば、政治や経済を含めた日本社会の構造は半世紀を経ても、1991年のバブル経済の崩壊とその後の新自由主義経済の洗礼を受けても、本質があまり変わっていないのだろう。昭和の高度成長期、1964年の東京五輪大会の成功、1973年の石油ショックからの回復、1980年代の貿易立国実現といった成功体験を忘れられない人たちが一定数いる。実権を握る人々に対して、序列が下位の者が大胆な改革案を具申するのは難しい。具申したとしても、必要性は容易に理解されないだろう。

1990年代以降、日本企業の多くはバブル経済の崩壊への対応として、正社員の賃金削減や非正規雇用の増大に大きく依存してきた。能力主義や成果

主義が声高に叫ばれてきたが、適切な目標設定や公正な評価はなされてきたのだろうか。また、経済のグローバリゼーションに伴って、海外発の緊急事態に対応を求められる例が増えてきた。2008年9月のリーマン・ブラザーズ社破綻を発端として世界金融危機が発生した際は、日本の製造業が深刻な状況に陥った。2020年初頭から新型コロナウイルス感染症が世界中に広がり、飲食業や観光業を中心に各国は大打撃を受けたが、現在はコンテナやトラック運転手の不足で物流が十分機能せず、原油高が経済の回復を阻害している。一貫しているのは、日本がこの30年間、労働者の実質賃金が低下し続け、ジェンダー・ギャップが世界の低位20%を低迷していることである。グローバリゼーションの時代には、国内にいても「適応」が求められる。

読者には、『タテ社会の人間関係』の姉妹編として著された『タテ社会の力学』も勧めたい。元々、同書は1978年に出版された。現在、評者の手元にあるのは、講談社学術文庫として2009年7月に発行され、2020年1月に第7刷となったものである。この本は多すぎない分量であり、かつ対談形式の章も含まれるため、だいたい読みやすいが、中身は極めて充実している。個人と集団、集団と集団の関係に分けて分析しているが、「世間」、そして近年よく取り上げられる「空気」を理解するのに役立つだろう。

『適応の条件』に限らず、中根の研究成果をやさしい文体で読みたいという人、短時間で概要を把握したいという人には、講談社の現代新書編集部が編成した『タテ社会と現代日本』（講談社、2019年）が良いであろう。たとえば、過労死がなくなる原因として、日本では個人が属する小集団のルール（社会慣習）が上位集団のルール（国の法律）に優先されると著者は指摘する（『タテ社会と現代日本』pp. 66-67）。個人は小集団を通じて上位集団と接触しないため、小集団の成員は小集団内からの非難を恐れて、上位集団のルールより小集団のルールを重んじる（同、p. 67）。これは、日本政治の抱える問題点、たとえば「国益より省益」や「派閥の論理」などにも通

じる。一方、同書では著者の訥々とした語り口を味わうことができないので、ぜひ原著に挑戦してほしい。

最後に、ヤフーニュースが2019年6月に中根に行ったインタビュー「『序列のある社会は本来、女性にはプラス』東大初の女性教授・中根千枝」(<https://news.yahoo.co.jp/feature/1354/>, 2019年6月17日配信)を紹介したい。インタビューの2ヶ月前、東大名誉教授で社会学者の上野千鶴子が平成31年度東京大学学部入学式において、女性差別が厳然として存在する「タテマエ平等」を鋭く指摘し、恵まれた環境と能力を持つ東大生が恵まれない人々のためにそれらを使うことを強く奨励した(全文は、[https://www.u-tokyo.ac.jp/ja/about/president/b\\_message31\\_03.html](https://www.u-tokyo.ac.jp/ja/about/president/b_message31_03.html)に掲載)。上野の祝辞は賞賛・反発ともに強く喚起したが、中根はその10年前の2009年4月の大学院入学式で、女性の置かれた差別的な状況を穏やかな言葉遣いで指摘していた(全文は、[https://www.u-tokyo.ac.jp/ja/about/president/b\\_message21\\_05.html](https://www.u-tokyo.ac.jp/ja/about/president/b_message21_05.html)に掲載)。

ヤフーニュースのインタビューに対して、中根は「日本には階層がなく、『連続』の思想です。つまり、自分はその人より持っているが、でも上には自分よりもっと持っている人がいる、という相対的比較の社会。だから、上層の者にはその特権を持たない人のために一定の義務がある、という思想、ノブレス・オブリージュが根づいていない。『もてる者』が『もたざる者』へ援助する思想が希薄なのです。」と述べた。日本には階層がないが、病気・失業・災害などでいったん経済状況が激変すると、個人のやる気と努力だけでは困難から抜け出しにくい。果たして、どこからどこまでが自己責任で、どこからが社会の責任なのか。「失われた30年」を「失われた40年」にしないためにも、今こそ社会全体で真剣に考える必要がある。